

タムバレイン大王 第一部

運命の女神の車輪を自らの手でまわすスキタイの羊飼

谷 崎 寿 人

1

「タムバレイン大王 第一部」(Tamburlain the Great, Part I) はマーロウ (Christopher Marlowe 1564—93) 第二番目の作と推定されるもので、出版業者組合登録簿 (Stationers' Register) に記載されたのは1590年8月のことである。これは第一部 (Part I)、第二部 (Part II) 合わせたものであり、この年 (1590年) に出版された八つ折り版 (octavo) のとびら (扉) の中程には、「……二つの悲劇的物語 (Deuided into two Tragical Dis/courses, …) とある。同時代の作家グリーン (Robert Green 1558—92) の著作「ペリメディス (Perimedes the Blacksmith) の中にタムバレインに言及した個所があり、この作品の登録、出版が1588年のことであるから、「タムバレイン」は既に1587年には書かれていたものと思われる。なお最初の上演は、1590年八つ折り本が刊行される三年前のことであった。

「タムバレイン大王」の原典は何であるのか、その調査は約90年前から始められたのであるが、未だすべて明らかになったとは言えない状態である。「最近の徹底的な調査はパーセル (H.D. Purcell) によってなされた」とメシュイン版の編者カニングガム (J.S. Cunningham) は言っているが¹⁾、それによると、三つの事実が明らかになったようである。第一は、タムバレイン物語の原型がヨーロッパに完全に定着したのは、ティムール汗 (Timur Khan) がバヤジッド一世 (Bayazid I) に1402年アンゴラ (Angora—Ankara の旧名) で劇的な敗北を喫せしめてから一世紀あまり経た頃であったこと。第二、この資料がタムバレイン大王第一部の中で展開するのは、二つの主要な種本による—その一つはペトルス・ペロンディヌス (Petrus Perondinus) によるラテン語で書かれたもの、もう一つはジョージ・ウェットストウン (Geroge Whetstone) による英語で書かれたもの—、第三、重要でない一群の種本も続編を書くにあたっては用いられたこと、である。ウェットストウンは当時クロード・グリュ

ジェ (Claud Gruget) の ‘Diverses Leçons (1592)’ を翻訳、再整理していた。なお ‘Diverses Leçons’ はスペインの歴史家ペトロ・メクシア (Pedro Mexia) の ‘Silva da Varia lección (1540)’ の翻訳であった。ペロンディヌスの記述自体はメクシアの著作によっているが、それとは異なっているところがある。したがってウェットストウンのものとも、タムバレインの読者にとっては重要な意味をもついくつかの点において、異なっている。マーロウが資料として用いた書物はトマス・フォーテスキュ (Thomas Fortescue) が訳したメクシアの書 (‘The Foreste’ という題になっている。1571年出版) ではなく、ウェットストウンの手になるものであることが立証されている。メクシアの書いた話のうちマーロウが用いた部分は、「イギリスの鏡 (the English Myrror, 1586)」という題のもとにおさめられている。

「タムバレイン大王、第一部」は作者の初期の作品である（一説には彼のケムブリッジ大学在学中の作とある）ために、劇としての完成度には欠けているが、科白の力強さ、華麗な点で当時の評判は上々であったということである。エリオット (T.S. Eliot) は、「クリストファー・マーロウの無韻詩についての覚え書 (Notes on the Blank Verse of Christopher Marlowe) の冒頭、スウィスバーン (A.C. Swinburne) の評を引いているが、そこには、マーロウを「イギリスの悲劇の父でありまたイギリスの無韻詩の創造者は、それ故にシェイクスピアの師でもあり指導者でもあった」と言っている。もっともエリオットは、この引用に続けて、「この文には人を誤らせる二つの仮定と二つの結論がある」と論を展開してゆくのであるが²⁾。夙に言われているようにマーロウは、流麗なる無韻詩という形式で、タムバレインを世界征覇の野望を抱き、着々とそれを実現してゆく霸王として画いているわけである。

タムバレインの人間像があまりにも巨大であるため、他の登場人物、彼に征服されるペルシア王 マイセティーズ (Mycetes)、トルコ皇帝バジャゼス (Bazazeth)、後に王妃となるゼノクレイティ (Zenocrate)、タムバレインの部下テチェリーズ (Tenchelles)、ユーサムカセイン (Usumcasane) いずれも生彩を欠く結果となっている。これは劇構成の上からは、欠点であろう。しかし反面、イギリスにおける文芸復興期のひとりの旗頭であったマーロウの精神の高揚が、恐らくは実際のティムール評以上に、タムバレインを高揚せしめ、その口をついてでてくる科白がエリザベス朝の観客の共感を獲得するに至ったということであろう。そしてその科白は当時のみならず二十世紀の現在においても、きわめて人の心を動かすものであることは作者マーロウの手柄と言わねばなるまい。またこれらは同年の生れであるシェイクスピア (Shakespeare) に種々の点で影響を与える結果となった。

2

プロローグ（開幕前にごく簡単にどのような劇かを観客に語る序詞）において

We'll lead you to the stately tent of war,

Where you shall hear the Scythian Tamburlaine

Threat'ning the world with high astounding terms

And scourging kingdoms with his conquering sword.* (3-6)

とコーラス（エリザベス朝劇の場合は、合唱団のことではなく、ひとりで解説の役をする）に述べさせているが、はやくも、「世界を威嚇する大きな恐ろしい声のスキタイ人タムバレイン」と紹介するのである。タムバレインの最初の登場は第一幕第二場においてである。この時はまだ一介の羊飼いに過ぎないタムバレインであるが、既に帰国途中のゼノクレイティの一行から宝石、財宝を略奪してしかも一行の目的地であるシリアまで敵対する者を征服しながら軍を進めようというのである。そしてその威勢たるや、部下テチェリーズの言をかりるならば、

As princely lions when they rouse themselves,

Stretching their paws and threat'ning herds of beasts (I, ii, 52-3)

とある。「前脚をのばして百獣の群をおびやかすライオン」とは言いえて妙であり、序詞といわず第二場といわず、あらゆる箇所タムバレインの強大さは明らかにされるのである。

また戦って強大というだけでなく、戦術にもたけていて、人心の収攬にも長じている。マローウの後の作品にも出てくるマキァベリ (Machiavelli) の権謀術数の駆使を早くもこの作にとりいれたものであろう。同じく第一幕第二場中程で、タムバレインの部下の兵士があらわれ、一千騎ものペルシア軍が押しよせてきたことを認知する。一旦は部下の兵五百に対して勇敢に戦うことを下知するが、たちまち命令を変更して談判をおこなうこととなる。タムバレインは攻めよせてきたペルシアの将セリディマス (Theridamas) を、

Noble and mild this Persian seems to be

If outward habit judge the inward man. (I, ii 161-2)

と部下テチェリーズに対する傍白で述べ、セリディマスその人に対しては、

In thee, thou valiant man of Persia,

I see the folly of thy emperor:

* 引用は J.S. Cunningham 編 *Tamburlain the Great (the Revels Plays)* による。

.....

(I, ii, 165-6)

「汝を見ていると、汝のつかえる王の愚かさが見える」と、セリディマスの勇猛さを最大限のことばで賞揚するのである。そしてこのあとでペルシア王をすててわが軍に加われとすすめる。結局セリディマスは躊躇の色を見せながらも、タムバレインのことばをいれ、その麾下に入ることになる。

Theridamas. Won with thy words and conquered with thy looks,

I yield myself, my men and horse to thee:

To be partaker of thy good or ill

As long as life maintains *Theridamas.* (I, ii, 226-30)

第二幕第一場では、ペルシア王の弟コスロウ (Cosroe) さえも、タムバレインと同盟を結ぶことを欲している。コスロウはかねがね兄王を暗愚、王者にふさわしくない人物と思っており、機会あらば兄ペルシア王にとってかわらんものと考えていたのである。セリディマスが既にタムバレインの軍勢に合流したことがわかり、さらに自分が加わることによって、連合軍がペルシア王マイセティーズの軍にあたれば勝利はまちがいなく、その結果王冠はコスロウの頭上にかがやくことになるとの計算をしたのである。タムバレイン・コスロウ連合軍は予想通り勝利した。第二幕第五場では、タムバレインはコスロウに王冠を渡す。コスロウはタムバレインを司令長官に任ずると言って首都ペルセポリス (Persepolis) に凱旋してゆく。しかしコスロウの得意もここまでであった。セリディマスは部下になったが、コスロウは決してタムバレインの部下にはならぬ。したがってペルシア王国を手中にするためには新王コスロウを敗北させなければならない。ペルシアを制することが、後の世界制覇の第一の布石であると、タムバレインは考えた。第二幕第七場コスロウ軍とタムバレイン軍の終いは終わった。コスロウは万斛の恨みを抱いて死ぬ。タムバレインを利用したと思っていたのが、逆に利用されていたことを知ったためである。

Cosroe. Barbarous and bloody *Tamburlaine,*

Thus to deprive me of my crown and life! (II, vii, 1-2)

あるいは

Theridamas and *Tamburlain*, I die,

And fearful vengeance light upon you both! (II, viii, 50-1)

タムバレインが野蛮、残虐 (barbarous and bloody) であることは、第三幕から第五幕にかけてのトルコ皇帝バジャゼスに対してとった行為に明白に示されることになる。第三幕第一場は、トルコ軍が、当時ギリシアのコンスタンチノーブルを包囲攻

撃している。そのさなかにタムバレイン軍が押しよせてきてトルコ軍と一戦交えようと企んでいることを知る。そのためバジャゼスは部下の司令官 (basso) をペルシアにいるタムバレインのもとに派遣してペルシアにとどまらせようとする。しかしタムバレインはその命令に従わず、攻撃して勝利する。バジャゼスは言う。「トルコ皇帝で外敵によりこのような敗北を喫した者はいない (Ⅲ, iii 233-5)」、この後バジャゼスは俘虜となり、タムバレインの転戦するところどこでも檻に入れられ引かれてゆく。時には、さらに次のような屈辱に耐えねばならない。

Tamburlain. Bring out my footstool. (Ⅳ, ii. 1)

They take him out of the cage.

footstool (踏み台) とは、バジャゼスのことであり、続けて次のように言う。今や己れの威名をよく承知しているタムバレインにしてはあまりにも残虐な行為である。

Tamburlain. But, villan thou that wishest this to me,

Fall prostrate on the low disdainful earth

And be the footstool of great Tamburlain,

That I may rise into my royal throne. (Ⅳ, ii. 12-5)

バジャゼスの最期は、第五幕第一場 (これが最後の幕、最後の場であるが) において

Bajizeth. Now, Bajazeth, abridge thy baneful days

And beat thy brains out of thy conquered head,

...

Then let the stony dart of senseless cold

Pierce through the center of my withered heart

And make a passage for my loathèd life.

He brains himself against the cage

(Ⅴ, i. 286...304)

と言って、檻に頭を打ちつける。

さらに残虐であるのは、トルコ皇帝征服に続いて、第四幕から第五幕にかけてのエジプトのサルタン (Soldnd=Sultan) 攻略に際してタムバレインの取った態度である。サルタンはゼノクレイティの実の父親であり、結局サルタンは敗れて、タムバレインが娘のゼノクレイティと結婚し、彼女をペルシア王妃とすることをうけいれ和睦することに至るのであるが、それ以前のタムバレインの言動が問題である。使者をしてサルタンに通告させたのは、

Messenger. ...

The first day when he pitchth down his tents,
White is their hue, and on his silver crest
A snowy feather spangled white he bears,
To signify the mildness of his mind

.....

But if these threats move not submission,
Black are his colours, black pavillon,
His spear, his shield, his horse, his armour, plumes,
and jetty feathes menace death and hell
Without respect of sex, degree, or age,

He razeth all his foes with fire and sword, (IV. ii. 49...63)

であり、要するに第一日目の天幕の白色は寛容のしるし、第二日それが緋色になると、武器をもつ者すなわち兵士は赦さず、第三日天幕が黒色になり、旗も黒になると老若男女、身分を問わず殺戮するというのである。そして、第五幕、第一場の冒頭で、第三日を過ぎて後ダマスカスの総督 (Governor of Damascas) が三、四人の市民、月桂樹の枝をもった四人の乙女をつれてあらわれ、乙女をタムバレインのもとに和を請わせに行かせるが、タムバレインは黒一色の服装で迎え、降伏が遅すぎたと言いい、慈悲を求める乙女たちの嘆願を一顧だにしなかった。己れの立てた計画は毫も変更するところがない。これはやはり実際のチムール汗もそうであったろうが、それ以上にイギリスのルネッサンス期に生れたマーロウの心の反映であったろう。

反映といえば、第一幕、第二場に屢々引用される個所がある。それはタムバレインがセリディマスをペルシア王から引き離し、己れの陣営に引き入れようと誘う場面であるが、

Tamburlain. Forsake thy king and do but join withe me,

And we will triumph over all the world.

I hold the Fates bound fast in iron chains,

And with my hand turn Fortune's wheel about,

And sooner shall the sun fall from his sphere

Than Tamburlain be slain or overcome. (I, ii. 171-6)

「運命の女神をしっかりと鉄の鎖に縛りつけ、自分の手で運命の車を回転させている。太陽が天球から落ちないのと同様にタムバレインも殺されたり征服されることはない。」とあるのは、やはり運命観がこの時代には変化をしつつあったことの証して

ある。運命の力には人間の力は遠く及ばないという考えをすて自分自身の手でそれは動かすことのできるものだと考えは、新時代、イギリスにおけるルネッサンス期の特徴であった。マローはそれをいち早く己れのものとして、タムバレインの口をかりて世に示したとすることができる。

3

プロローグでこの劇の主人公はスキタイのタムバレインとあるからには、タムバレインの言動に自ずと焦点があるのは当然である。しかし登場人物の数は三十にも及ぶことであるから、舞台上でタムバレイン同様の強い個性をもつ者があらわれてもよさそうであるのにそれがない。たとえばタムバレインに最も近い位置にあるゼノクレイティですらあまり性格が明瞭でない。容貌・姿形については若干の形容はある。

Zenocrate, lovelier than the love of Jove,

Brighter than is the silver Rhodope

Fairer than whitest snow on Scythian hills (I, ii. 87-9)

ブラッドブルック (M.C. Bradbrook) は、「タムバレインはゼノクレイティに恋をしている時でさえ、人間の標準の高さまでほとんど降りてゆくことがない。……彼女 (ゼノクレイティ) はタムバレインを半神性の人と考えている³⁾……」と言っている。たしかにタムバレインの個性があまりにも強烈で、しかも神の域に達しているとすれば、相対的にゼノクレイティの方が人間性があることになるのかもしれない。ゼノクレイティの従者であるアジダス (Agydas Median lord attending Zenocrate) は、終始タムバレインを野蛮な男とみなし、ゼノクレイティがタムバレインを愛する気持がつのってゆくにつれて、ますますタムバレインに反撥し、遂にはそのために自害することになる。ある意味ではこのアジダスが最も個性的人物といえないであろうか。

Agydas.……

Then haste, Agydas, and prevent the plagues

Which thy prolonged fates may draw on thee: (III, iii, 100-1)

タムバレインからの迫害を避けるため自ら短剣でわが身を刺す結末となり、タムバレイン腹心の部下テチェリーズとユーサムカセインに敬意を表されることになる。ここに出てくるラチェリーズ、ユーサムカセインはタムバレインの羊飼時代からの友であり部下であるが、劇の上ではほとんど必要がない程の人物である。

敗北の後、檻に入れられて引きまわされていたトルコ皇帝バジャゼスと檻につきしたがっているその妻ゼイビナ (Zabina) の場合は、タムバレインの迫害一たとえば踏

み台にするような (IV, ii) — が大きければ大きい程反撥も大になる。ゼイビナも同様である。ゼイビナは次のようにののしる。

Zabina. Unworthy king, that by thy cruelty

Unlawfully usurpest the Persian seat,

Darest thou, that never saw an emperor

Before thou met my husband in the field,

...

(IV, ii 56-9)

この科白で理解できるように、ゼイビナとゼノクレイティを比較すると、同じく俘虜の身ではあっても、ゼノクレイティは優遇されており、ゼイビナは虐待されているので、その辛辣さにおいて大きな相違のあることは当然のことである。またこれも当然のことながら、辛辣の度合の大である方が観客の印象を強くすることになる。ゼノクレイティの個性が発揮されるのはこのことによるし、ゼイビナの舞台の上の役割はさほど大でないとしても観客のうけはよいことになる。悲劇においてはより悲劇的であることが他より際立つ所以である。

一時的に兄から王位篡奪に成功したペルシア王コスロウ、彼は自らは権謀術数にたけていると思いこんでいたが、結局はタムバレィンと、以前は兄ペルシア王の部下であって、今はタムバレィンに説得された結果その配下となっているセリディマスに欺かれたことに気付く。そして嘆ずる。

Cosroe. Barbarous and bloody Tamburlaine,

Thus to deprive me of my crown and life!

Treacherous and false Theridamas,

Even at the morning of my happy state

Scarce being seated in my royal throne,

To work my downfall and untimely end!

王座につかぬ前に、没落と時ならぬ最後をもたらしたことになるが、やはりコスロウの事態を見きわめる能力の欠如、タムバレィンのように運命を自らの手で動かすことに欠けていたことになろう。

このコスロウの兄、もとのペルシア王マイセティーズは、コスロウの言葉によれば暗愚な王であったということであるが、その真偽も不明、早々と退場 (II, iv) ということになるが、タムバレィンには

Thou art no match for mighty Tamburlain. (II, iv. 41)

と相手にもされない状態である。

その他バンヤゼスの属国の王たちに至っては劇の上で何の役割をも演じないことになっている。

こう見てくると、あらゆる事柄がタムバレイン大王に集中し、他の人物からは拡散してゆく傾向がある。これはマーロウの客気のなせるわざか、また当時の観客の希望によるものか、記録によると非常な人気を得ていたということである。時流にのった素材を巧みに利用したマーロウの才である。

〔註〕

- 1) Cunningham, J.S (ed); Tamburlain the Great (Revels plays 1981) Introduction p. 10.
- 2) Eliot, T.S.: Notes on the Blank Verse of Christopher Marlowe (The Sacred Wood 1920) p. 86.
- 3) Bradbrook, M.C.: Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy (Cambridge UP 1935) p. 140.

(たにざき ひさと 本学助教授 英語)